

トーマス・ベルンハルトの『没落者』について - 未決定性の原理 -

熊沢 秀哉

Über Thomas Bernhards "Der Untergeher" - Prinzip der Unentschiedenheit -

KUMAZAWA, Hideya

1. 研究テーマとしての「未決定性」

トーマス・ベルンハルトの『没落者』⁽¹⁾ (1983) は、ベルンハルト後期に成立した長編小説であり、『伐採』 (1984)、『古典絵画の巨匠たち』 (1985) と共に、ベルンハルト研究においては、「芸術三部作」⁽²⁾ と呼ばれるものの一角を占めている。

主な登場人物は、ベルンハルト作品としては極めて異例なことに、モデルとなった実在の人物の名前がそのまま与えられているグレン・グールド、彼とはほぼ同年齢であり、共にピアニストを目指したヴェルトハイマーと、語り手である「私」の三人である。この三人は、1953年、ザルツブルクのモーツァルテウムで開かれた、ホロヴィッツを教師とするピアノのマスターコースで知り合い、生涯の友となる。テキスト内の現在の時点で、既にグレン・グールドは死去しており⁽³⁾、ヴェルトハイマーも自殺している。残された「私」は、ヴェルトハイマーの埋葬に参列し、ヴェルトハイマーが自殺の直前までを過ごしたトライヒ⁽⁴⁾にある狩猟小屋を訪れるためにヴァンクハムの宿に入る。「私」は、宿の女主人とは知己の間柄であり、宿の食堂で女主人が現れるのを待ちながら、あえて彼女を呼ばず、自殺したヴェルトハイマーについて、また病死したグレン・グールドについて様々な思考と想起を巡らせる。

『没落者』の主要なテーマが、芸術に関するものであることは明らかだ。作中のグールド、ヴェルトハイマー、そして「私」も幼い頃からピアニストになるための修練を積み、修行期の仕上げとしてホロヴィッツのコースに参加する。ホロヴィッツの名声に惹かれて世界各地から集うピアニストの金の卵たちの中であって、ヴェルトハイマーも「私」も才能という点では他のコース参加者たちに引けは取らない。ベルンハルト作品において、登場人物たちが関わる「芸術」には完全性、至高性の要素が常に付随している。芸術活動のジャンルを問わず、芸術家たちは他から突き抜けた完全性、至高性を意識しつつ芸術活動を行わなければならないとされる。一般に、まだ何の業績もない駆け出しの若い芸術家が崇高な理想を掲げることは容易だろう。しかし、芸術家として世の中に出て以降もその姿勢を維持することは至難の技である。何人かの批評家たちのポジティブな評価、国内でいくつかの賞を取ることに、絵画であるなら何点かの自作が国内の美術館に買い取られること、演奏家であるなら比較的大きなコンサートを何回か開くこと、などで満足してしまうのが凡百の芸術家たちの現実の姿であろう。「芸術三部作」の一つと見なされている、『伐採』 (1984) の中でベルンハルトはこのような芸術家の姿を揶揄し、厳しく批判している。ベルンハルト作品に登場する多くの主人公たちは、年齢を重ねても、彼らの活動するジャンルにおける完全性、至高性を目指す姿勢を失っていない。『没落者』のヴェルトハイマーや「私」もそうした者の一人に数えられる。だが、ベルンハルト作品の主人公たちの多くは、完全性を目指す故に自らの作品または研究を完成し発表することが出来ない。完成させる以上、それらは完璧な作品、研究でなければならない、それはある意味で実現不可能なことだからだ。

『没落者』に登場するグレン・グールドは、ベルンハルト作品の中では様々な点で異例の存在である。オーストリアにおけるベルンハルト研究の第一人者であるM.Mittermayerは、『没落者』のグールドについて次のように述べている。「グレン・グールドは、著者の作品における他の登場人物たちが目指し、そして大抵は挫折するところの性質の権化として規定される」⁽⁵⁾。すなわち、『没落者』のグレン・グールドは、ピアニストとして芸術の完全性、至高性に到達し得ている希有な存在なのである。またこのような完全性、至高性に到達したが故に『没落者』のテキスト中で、グールドは「天才」であったとされる。あるいは逆に、完全性に到達し得た原因として、彼の「天才性」が繰り返し強調される。このような存在は無論のことながら滅多に現れるものではなく、『没落者』のグールドも、ホロヴィッツをも超える百年に一人の逸材として描かれるのだ。

このような、「真の」芸術とされるものと「天才」の結びつきは、ドイツ語圏の文学、哲学ではドイツ・ロマン派以来の伝統に連なるものではある。すなわち、真の芸術作品は天才によってのみ可能となるものである、というような。しかし現代の作家であるベルンハルトにおいては、ロマン派のように、この天才性が牧歌的なイメージや幸福に繋がるものとして描かれることはない。むしろ逆に、通常の間活動の領域を超えた、非人間的なもの、致死的なものの性質を帯びる。テキスト内のグレン・グールドが、その芸術性の頂点である「ゴルトベルク変奏曲」を演奏中に脳内出血で死亡したことはそれ故、ある意味で必然的な結果として描かれる。また、グールドと「私」の友人であったヴェルトハイマーの自殺についても、芸術の完全性、至高性と深く関わるものとして描かれるのである。

このような『没落者』に対して、従来のベルンハルト研究は様々なアプローチを試みてきた。テキスト解釈を試みるもの、ベルンハルト作品の特徴である言語の「音楽性」に焦点を当てるもの、ベルンハルト作品全体の中での位置づけを試みるもの、あるいは、『没落者』のテキスト全体をグールドの「ゴルトベルク変奏曲」の構造を写したものと見なそうとする力業まで様々だ。その中で、本稿では、テキスト解釈的な方向性のアプローチを試みるものである。ベルンハルト作品における言語の特殊性は明白であり、また、ピアニスト、グレン・グールドが登場する『没落者』と音楽の関係性も魅力的なテーマではあるが、それらは一度研究で指摘されてしまえば再度取り上げる必要性はそれ程大きくはない性質のものである。

『没落者』のテキストは、亡くなってしまった二人の友人を巡る「私」の想起と思考の流れから構成されている。「私」とヴェルトハイマー、グレン・グールドの三人は、グールドが「天才」であるという点を除けば極めて類似した性質を共有している。すなわち、芸術における完全性の追求、孤独を好む人間嫌いであること、両親との葛藤などの点だ。勿論、ピアニストであること、そして音楽家としての芸術の追求という姿勢を除いては、『没落者』のグレン・グールドと、実際のグレン・グールドの間に共通点はほとんどない。『没落者』のグールドは、ベルンハルトによって、ベルンハルト作品の登場人物として創作されたものなのだ。『没落者』の語り手である「私」にとって、友人であるグールドの死は、芸術の完全性に接近し得たという非人間的行為の結果としてほぼ必然的なものである。しかし、それに続くヴェルトハイマーの自殺は、「私」にとって容易に処理することの出来ない出来事となっている。

ヴェルトハイマーと「私」は、グレン・グールドとは異なってピアニストとしてのキャリアを放棄したという共通点を持ち、精神的により近い存在である。ピアニストの道を断念した後の進路についても、ヴェルトハイマーが精神科学、「私」が著述家という類似性を持ち、共に研究結果や作品を発表することが一度もない。また共にウィーンに住居を持ち、上部オーストリアにも狩猟小屋を所有し、それらの間を行き来しながら生活をしている。友人とこのような共通性を持つ「私」にとって、ヴェルトハイマーの自殺は自らの存在をも脅かす可能性を秘めた問題となるのである。

従来のベルンハルト研究においてもヴェルトハイマーの自殺については様々な言及されている。

M.Mittermayerは、以下のように述べている。「単独で、あるいは二名の会話相手と共に語り手は、〈没落者〉の人生のポイントを再構成し、彼の自殺の原因を理解しようとする」⁽⁶⁾。「友人の自殺の原因を探る中で、語り手

は様々な推測をしている。彼は、ピアニストとしてのヴェルトハイマーが落ち込んだ出口のなさや、グレン・グールドの死を考えるだけではない。ヴェルトハイマーは両親の死後、妹を自分の側に置き止めようとする。彼女がスイスの富豪と結婚し、兄の束縛から逃げ出した後、彼は妹の婚家の付近で首を吊る」(7)。

また、A. Pfabiganは、「テキストはまた、グレンの〈自然死〉とヴェルトハイマーの自殺の間の複雑で謎めいた関係を描いている。本質的に妬み深い性質のヴェルトハイマーは、(...)、グレンの死を真似たのかもしれない、あるいはグレンの死に耐えられなかったのかもしれない。(...)しかし、グレンは、(...)ヴェルトハイマーを〈没落者〉と名づけることによって彼の死に関与している。(...)グレンは、まず自らの存在そのものによって、次にその命名によって殺人を行ったのだ」(8)と述べている。

これらの研究者が指摘するように、「私」が考察するヴェルトハイマーの自殺には複数の要因が作用している。その中でも「天才」としてのグレン・グールドの存在は、一度は芸術家を志したヴェルトハイマーの挫折の原因と見なされており、彼の死にも深く関与しているだろう。しかし、Mittermayerも述べているように、ヴェルトハイマーの自殺に関する「私」の考察はグレン・グールドのみに限定されているわけではない。ヴェルトハイマーと長年二人で生活を共にしてきた彼の妹の結婚、ヴェルトハイマーに一言も告げることなく着の身着のままスイスへ脱出し、富豪と結婚した妹の存在も無視出来ず、詳しくは後述するが、その他の細かな要因も見られるのである。

『没落者』のテキストでは、「私」の考察はヴェルトハイマーの自殺を巡って旋回している。そこに異論を差し挟む余地はほぼない。しかし、「私」の考察は、自殺の原因を求めるものでありながら、最終的な結論には達していない。この点について、例えばMittermayerは以下のように述べている。「この小説は、ヴェルトハイマーの自殺後から始まり、本質的には、なぜかつての同志が突然命を絶ってしまったのか、その理由を追及しようとする友人の思考と想起から成立している。ベルンハルト文学における特徴的な語りのモデルが再び見られる。すなわち、非常にショッキングな出来事の後、この出来事へ至る致命的展開の原因を探ろうとする者が現れる。大抵の場合、この試みは一義的な解明へ至ることはなく、考察可能な一連の可能性が存在するだけであることを確認する結果となる」(9)。あるいは、W. Huntemannも、「(ヴェルトハイマーの)自殺の決定的な原因は、結局究明出来ない」(10)と結論づけている。

『没落者』の語り手である「私」は、「生涯の友」であるグレン・グールドとヴェルトハイマーの死に傷つき、苦しんでいる。唯一生き残ってしまった者として「私」は、彼らの死を正面から受け止め、理解しようとしなければならない。『没落者』の「私」の立場とはそのようなものであり、『没落者』のテキストは、この「私」による孤軍奮闘の証でもある。その中で、とりわけヴェルトハイマーの自殺の原因究明について多くのスペースが割かれながら、遂に結論的なものにたどり着かないことは、MittermayerやHuntemannが指摘しているように、「私」の目的の未到達性、失敗であると解釈されるのも無理からぬものであろう。『没落者』のテキスト受容に際して感じられる曖昧な読後感もこれに起因するものであると推測される。

本稿は、このような『没落者』の特徴である、未到達性、換言すればオープンな状態、を「私」の究明の努力のネガティブな結果であるとは捉えない。そうではなく、それら一連の思考が、むしろ積極的にオープンな状態に導かれているものであるという解釈を提起する。本稿ではこのオープンな状態を「未決定性」と名づけることとする。この未決定性の概念から『没落者』のテキストを捉え直す時、この作品に対する新たなアプローチが可能となるのである。

2. 未決定性—自殺の原因

前章で取り上げた従来研究が示すように、『没落者』のテキストを動かす最大のモーメントがヴェルトハイマーの自殺であり、「私」による自殺の原因究明がテキストの主たる構成要素の一つであることは明白である。そして、「私」によって究明されていくヴェルトハイマーの自殺の原因とされるものが一つの結論に集約されないことが、テ

クストの未決定性を生み出す最大の要因となっている。本章では、テキストに示されるヴェルトハイマーの自殺の原因について詳しく見ていくこととする。

2.1. 自殺の原因としてのグレン・グールド

ヴェルトハイマーと「私」、そしてグレン・グールドはいずれも世界的なピアニストになることを目指してホロヴィッツのコースに参加している。すなわち、ピアノのヴィルトウオーゼ⁽¹¹⁾になることを志していたのである。そして、彼らの目標は、ベルンハルト作品の主人公の典型例として、芸術の完全性、至高性に到達することに置かれることになる。この目標は、グールドのような「天才」でなくとも、それぞれの個人が単独で目指す場合には、果てしない努力が目指す方向性として継続的に機能し続ける可能性を持つ。しかし、ある楽器の演奏者の場合、単独でヴィルトウオーゼへの道を歩むことは不可能である。創作に関わるような芸術領域の場合であっても、作品は受容されなければ存在意義が生じないという点において、完全な単独性はあり得ない。しかし、他の作品との明確な比較と、それによって生じる優劣の差異は、創作的な芸術活動にとって必ずしも必要ではない。ところが、楽器演奏者の場合、ヴィルトウオーゼへの道を歩み始める幼少期から絶え間なく他者との競争に晒されるのである。何らかのコンクールに参加することなく演奏家として認められることは不可能なのである。

ヴェルトハイマーと「私」も、かなりの水準に至るまでこの競争に勝ち抜く才能は有していた。オーストリアでは最高水準の教育を意味するであろうホロヴィッツのコースにおいても、彼らの演奏技術は他に引けを取らないものであるとされている。しかし、グレン・グールドは彼らとはレベルの異なる演奏者なのだ。ホロヴィッツのコースに参加することにより、グールドは、誰にも気づかれない瞬間に、いわゆる世界に認められる「グレン・グールド」として完成している。そしてその時既に師であるホロヴィッツをも凌ぐヴィルトウオーゼになっているのである。

ヴェルトハイマーと「私」は、グールドと親交を結ぶことによって、彼の天才性を目の当たりにする。それはヴィルトウオーゼになろうとする意思と、それに向けての努力のみでは到達することの出来ない領域なのである。ヴェルトハイマーも「私」も芸術を志すものとして、完全性と至高性を目指さなければならない。この二人が「天才」でなかったとしても、他のピアノ演奏者と比べて引けを取ることがなければ、この目標に向けて努力を続けることは可能であっただろう。そしてその道程において、ピアノのヴィルトウオーゼとなり得ることもあったのだ。当代のヴィルトウオーゼとされている者ら全てが「天才」であるわけではない。むしろヴィルトウオーゼとされる演奏者の中でも、真の「天才」と見なされる者は極めて稀なのである。ベルンハルト作品における完全性とはそのように位置づけられるものなのである。

『没落者』のグレン・グールドは、天才として超越的な演奏者である。ヴェルトハイマーと「私」はピアノ演奏者としてグールドに比肩することは絶対にあり得ない。そしてそれは、彼らが演奏者として完全性、至高性に到達することはあり得ないことを意味する。グールドの天才性に比すれば、彼らの才能は凡庸なものだからだ。凡庸な者が完全性に到達することはあり得ない。彼らにとって、芸術家は完全性を追求しなければならない存在である。しかし、自分たちよりも明らかに優れた者が存在する。その現実を目の当たりにしたヴェルトハイマーと「私」は、ピアノ演奏者としてのキャリアを放棄せざるを得ない。グレン・グールドはピアノのヴィルトウオーゼとして世界的な名声を獲得し、ヴェルトハイマーと「私」は無名のままヴィルトウオーゼへの道をひっそりと諦めるのである。グールドは勝者であり、ヴェルトハイマーと「私」は敗者なのだ。

幼少期からの十数年間をピアノの修行に捧げた二人にとって、この経験は大きな傷となる。特にヴェルトハイマーにとっては、生涯癒やされることのないショックとなった。『没落者』の「私」は、ヴェルトハイマーの自殺の原因をここに見ることとなる。

「私は、決してグレンほど上手く弾くことは出来なかったし、これが理由で(従ってヴェルトハイマーと同じ理由で)ピアノ演奏を、ある瞬間に諦めたのだ」(14)。ピアニストとしてのキャリアを諦めざるを得なかったこと、「ヴェ

ルトハイマーは最後までそれに苦しんだのだ」(33)。「グレンは勝利者で、我々は敗者なのだ」(33)。「ヴェルトハイマーには、(自殺以外の)他の選択肢はなかった」(33)。このように、テキストの開始から数十頁までの部分で「私」はヴェルトハイマーの自殺の原因について、彼がグレン・グールドの天才性に破れたが故であることを複数回挙げている。さらにテキストが展開する中でも、これについては何度も繰り返し言及される。「私」以外のヴェルトハイマー自身の言葉としても、「この町(ザルツブルク)で我々は死を拾ったのだ、ホロヴィッツの下で学び、グレン・グールドと知り合うことで」(47)、あるいは、「我々の場合、グレンが我々を滅ぼしたのだ」(111)などが見られ、ヴェルトハイマーが、生前から既にグールドとの出会いが自身と「私」にとって致命的なものであったことを認識していたことを示している。

生前のヴェルトハイマーにとって、共にグールドが原因でピアニストとしてのキャリアを諦めた自身と「私」は言わば運命共同体を形成していた。故に彼の言葉では、「死を拾った」のは「我々」であり、「滅ぼ」されたのも「我々」となる。しかし、事実として自殺したのはヴェルトハイマーであって、「私」ではない。だが、「私」にとっても自身の置かれた状況はヴェルトハイマーと全く同様のものであり、自殺のリスクは「私」にとってヴェルトハイマーと同様に存在するものである。それ故、「私」は、ヴェルトハイマーの自殺の原因を探りながら、同時に自身とヴェルトハイマーの差異を強調することになる。そうしなければ、自分もヴェルトハイマー同様自殺への道を突き進むことになるからだ。

テキストではこの結果、次のように語られることになる。「このホロヴィッツのコースの本来の犠牲者は私ではなく、ヴェルトハイマーだった。彼はグレンがいなければ確かにすぐれた、おそらく世界的に有名なピアニストになれたであろう」(121)と。また、ヴェルトハイマーの破滅の原因とされるグールドの演奏技術についても、さらに奥深く、ヴェルトハイマーに致命的となった、その具体的な瞬間に至るまで追求される。ヴェルトハイマーは、モーツァルテウムの建物内で偶然通りかかりに、グールドの弾く「ゴルトベルク変奏曲」を聴く。「グレンがほんの数タッチ弾いただけでヴェルトハイマーはもうピアノを止めることを考えていた」(122)。「故に、彼とグレンのゴルトベルク変奏曲との出会いは致命的だったのだ」(123)。グレン・グールドの弾くゴルトベルク変奏曲を聴いたことによるキャリアの断念、「彼は、このことに常に傷つけられ、病み、結局は(...)命を絶たれたのだ」(159)。そして遂には、「ゴルトベルク変奏曲がヴェルトハイマーを殺したのだ」(222)とまで言われる。

以上のように、『没落者』のテキストにおいて、「私」は、ヴェルトハイマーの自殺の原因として、天才的なピアノのヴィルトウオーゼであるグレン・グールドの存在を幾度となく挙げる。彼によって残された数多くの録音の中でも、グールドのアメリカデビュー作であると同時に彼の死の前年に再録音された「ゴルトベルク変奏曲」はグールドを象徴する作品である。この曲に『没落者』のグールドは、ホロヴィッツのコース期間中も集中して取り組んでいるが、彼の弾くこの曲の数タッチが、二十八年後のヴェルトハイマーの自殺に深く関与している、とされるのである。

ヴェルトハイマーの自殺の原因としてのグレン・グールドの存在を詳細に見て行く時、その全てがグールドの演奏、とりわけ「ゴルトベルク変奏曲」に集約されるわけではないことが分かる。グールドの「ゴルトベルク変奏曲」によってピアニストとしてのキャリアを放棄したことが致命傷ならば、ヴェルトハイマーの自殺はより早い時期に生じていてもおかしくはないのである。

『没落者』のテキストでは、ヴェルトハイマーの自殺の原因として、グールドの死を挙げる箇所が複数見られる。「ヴェルトハイマーはグレンの死に耐えられなかった、グレンの死後もなお生き続けることを恥じたのだ」(33)。あるいは、家族、友人、知人の死は「彼(ヴェルトハイマー)を全く動揺させなかったが、グレンの死は彼にとって死ぬほどのショックだった」(47)とされ、ヴェルトハイマーにとっては、身内の人間の死ではなく、グールドの死が特別な意味を持っていたことが明示される。では、何故ヴェルトハイマーはグールドの死にそれほどのショックを感じたのか。「私」の言うヴェルトハイマーの「恥」の感情とは何に起因するものなのだろうか。この問題について、「私」は以下のように思考する、「グレンの死によってヴェルトハイマーは、自分の失敗を決定的に意識した」(67)と。

「私」やヴェルトハイマーにとって、グールドの死は、世間一般に捉えられているような、偉大な才能の喪失などを意味するわけではない。また、「私」もヴェルトハイマーも生涯の友の死に対するセンチメンタルな感情を持つような人間ではない。彼らもまたベルンハルト作品の主人公として「精神的」な人間であり、たとえ失敗者であるとしても精神的な領域における完全性、至高性を希求する態度は失っていない。そのような彼らにとって、友人の死に関してセンチメンタルな感情に陥るなどということは、唾棄すべきものなのである。

「私」やヴェルトハイマーにとって、グールドは、そのヴィルトウオーゼとしての存在性の象徴とも言えるゴルトベルク変奏曲の再録音を完成させ、なおかつゴルトベルク変奏曲の演奏中に脳内出血に見舞われ命を落としたのであり、その死はただの死ではない。グールドの芸術は、より一層の完全性、至高性に到達し、それ故にグールドは言わば必然の結果として命を落としたのである。グールドの演奏は、「私」やヴェルトハイマーから見れば非人間的な完成度に至ったものであり、身体的には生身の人間であるグールドは、その極限性に耐えることが出来ない。その結果としての脳内出血であり、死なのである。

ヴェルトハイマーにとってこのように解釈されるグールドの死は、グールドの芸術性の完成度を示すものであると同時に、自らの失敗を際立たせるものとなる。ヴェルトハイマーは、グールドの天才性を目の当たりにしてヴィルトウオーゼの道を放棄し、精神科学へと転向した後も著作物を完成することが出来なかった。グールドの死が、究極の芸術性へと到達したが故の必然的な結果であるとすれば、自らの生はその逆に失敗の証に他ならない。そのように考えるとすれば、ヴェルトハイマーにとって残された道は自ら自身の命を絶つこと以外にないのである。『没落者』のテキストの後半部、「私」がヴァンクハムの宿屋の女主人と対面した後に、彼女に向けて「私」は次のように言う。「ひょっとしたらヴェルトハイマーは、このグレン・グールドが亡くなったが故に自殺したのだ」(169)と。またテキストの終盤部、宿屋からヴェルトハイマーの狩猟小屋へ向かう途中においても、「私」は、「ヴェルトハイマーは、(...)、グレン・グールドの死に耐えられず、その後直ぐに自殺した、(...)、グレン・グールドがその芸術の頂点で、卒中に見舞われたことの耐え難さ」(211f.)がヴェルトハイマーの自殺の誘因なのだ、と思考するのである。

『没落者』のグレン・グールドが、ヴェルトハイマーの自殺に対して及ぼした影響は、その天才性、そしてその死だけではない。さらに直接的には、グールドがヴェルトハイマーに対して発した言葉が彼の自殺の原因であると、「私」は思考する。「アメリカ・カナダ的な冷血さで、彼(グールド)はヴェルトハイマーを常に〈没落者〉と呼んだ」(26)のである。テキストの題ともなっている「没落者」("Untergeher")という名詞は、動詞、"untergehen"(沈む、没落する、身を持ち崩す)からの造語であり、グールドは、「私」やヴェルトハイマーと出会って間もなく、彼を「没落者」と呼ぶ。動詞から作られたこの造語の語感には極めて動的な内容を含んでいる。「没落者」とは、「untergehenする者」=「下に向かって歩き続ける者」、すなわち下降し続ける者、であり、その行き着く先は最下点である死以外にはない。グールドは、ヴェルトハイマーを「没落者」と呼ぶことによって、彼の性質と運命を決定づけてしまうのである。

テキストの終盤部において「私」は、グールドがヴェルトハイマーを「没落者」と呼んだことについて再度思考する。「しかしヴェルトハイマーの破局の始まりは、グレンがヴェルトハイマーに向けて、彼が没落者であると言った瞬間にあったのだ」(218)。「我々は、ある言葉を発し、そしてある人間を破滅させる」(218)。あるいは、「彼(ヴェルトハイマー)は、グレン・グールドによって最初の瞬間から、袋小路人間、没落者、であると見抜かれ、グレン・グールドによって最初に没落者であると言われた」(209)のだと。この箇所における「袋小路人間」("Sackgassenmensch")は、グールドではなく「私」によって作られた、ヴェルトハイマーを形容する造語である。ヴェルトハイマーの人生における道は、ある行き詰まりから次の行き詰まりへとあまり込むことの繰り返しであるという「私」の見方から創られたこの言葉はしかし、無限の下降を意味するグールドの「没落者」に比するとインパクトに欠ける。また、「私」はグールドとは異なって、ヴェルトハイマーに向けて直接「袋小路人間」とあるとは決して

言わないのである。

グールドの弾くゴルトベルク変奏曲のタッチや、グールドの死のケースとは異なって、グールドがヴェルトハイマーに向けて放った言葉である「没落者」に対するヴェルトハイマー自身の反応がテキストに描かれる場面はない。いかにグールドといえども、ほぼ初対面の人間に対していきなり「没落者」であると呼びかけることは明らかに突拍子過ぎる態度であり、呼びかけられた側も通常であれば感情を害するのが当然だろう。テキストにはヴェルトハイマーの反応が描かれていない以上、グールドにそのように言われた瞬間にはヴェルトハイマーも感情を害した可能性は捨てきれない。しかし、ヴェルトハイマーはその後、グールドとの交友関係に入り、十数年後にグールドを訪ねニューヨークに赴いた際にも再び彼から「没落者」と呼ばれる。だが、それにも拘わらずヴェルトハイマーはその後もグールドとの交友関係を継続している。

「没落者」という言葉に対するこのヴェルトハイマーの反応の理由の一つとして、グールドにそのように呼ばれる以前から、元々の性質としてヴェルトハイマーは「没落者」であったからだ、ということも挙げられる。グールドは、その造語によってヴェルトハイマーの性質を看破したのであり、ヴェルトハイマーをそのような存在へと作り替えたわけではないということだ。また、「私」によって、グールドの言葉はヴェルトハイマーの自殺の原因であるとされるが、この言葉を発するグールドに悪意は感じられない。従来研究において取り上げられることはほとんどないが、テキストには、ヴェルトハイマーを「没落者」であると形容するグールドの態度について、「アメリカ・カナダ的で、仮借なく、明け透けで、しかし有益な」(210)のものであるとする箇所がある。この「有益な」と訳した形容詞は、原語では、“heilsam”であり、“heil”=健やかな状態にする、すなわち「治癒効果のある」という意味も持つものだ。すなわち、ヴェルトハイマーには、グールドの言葉によって、自分の性質に気づき、気づくことによって快癒する可能性もあったのだ。

しかし、ヴェルトハイマーはおそらく、グールドの言葉の持つ治癒的な側面に気づきながら敢えてそこから目をそらしている。それ故にテキストではヴェルトハイマーの反応が描かれていないのだ。ヴェルトハイマーは、グールドの言葉の持つ規定的側面のみを受け入れている。グールドの言葉によって自らが「没落者」であることを認識し、それを受け入れ、没落者としての道を歩み続ける。そして最後には自殺に至るのだ、と「私」は考察するのである。

以上が、グレン・グールドの存在とヴェルトハイマーの自殺に関する「私」の思考である。このようにまとめれば、ヴェルトハイマーの人生とその自殺に関して、グールドの果たした役割の大きさが改めて確認されるであろう。『没落者』のテキストでは、ヴェルトハイマーの自殺に関してグールドの存在が持つ意味を巡る「私」の思考が最大の構成要素となっている。グールドは、その超越的な芸術性によってヴェルトハイマーにピアニストとしてのキャリアを諦めさせた。また、ヴェルトハイマーに向けて放った「没落者」という言葉が彼の人生を規定し、最後には自らの死によってヴェルトハイマーの自殺を導いたとされるのである。

「私」の思考の中では、ヴェルトハイマーの自殺の原因としてのグールドの存在は極めて大きな位置づけをされている。しかし、グールドが絡む複数の要因の中で、ヴェルトハイマーが自殺するに至った究極の理由は何であったのか、グールドの弾くゴルトベルク変奏曲であったのか、その芸術性の頂点におけるグールドの死であったのか、または彼らの出会いの時に放たれた「没落者」という言葉だったのか、という点に関しては「私」は語っていない。あるいは、それらの理由を有機的に関連づけ、一つにまとめようとする姿勢も示してはいない。「私」は、ある時は、グールドの演奏がヴェルトハイマーにとって致命的であったと考え、またある時は、その死が、そしてある時は「没落者」という言葉が致死性であったと思考するのである。それらの関係は、『没落者』のテキストにおいては並列的なものであり、結論はオープンなままだ。すなわち、ヴェルトハイマーの自殺に関するグールドの役割についての考察という『没落者』のテキストにおける最重要な構成要素に関して、「未決定」の性質を確認することが出来るのである。

2.2. 自殺の原因—その他の要素

前節で確認したように、ヴェルトハイマーの自殺の要因として、「私」の思考に占めるグールドの存在の割合は最大のものである。しかし、ヴェルトハイマーの自殺の原因に関する「私」の思考はグールドのみに限定されるわけではない。

ヴェルトハイマーは、グールドや「私」同様生涯未婚であり、おそらく友人と呼べる存在もグールドと「私」以外にはない。しかし、グールドや「私」と異なって、ヴェルトハイマーは一人で暮らしていたわけではない。若くして両親を自動車事故で亡くし、莫大な遺産を相続したヴェルトハイマーは、ウィーンの一等地にある住居とトライヒの狩猟小屋を拠点に約二十年間実の妹と共に暮らしている。この妹との関係は調和的なものではなく、ヴェルトハイマーは妹を専制的に支配している。妹は、兄の許可がなければ外泊も許されず、散歩でさえそのコースと時間を兄によって決められている。トライヒの狩猟小屋では自室の暖房も許されず、音楽を聴くことも許されず、真夜中に不眠の兄の部屋に呼ばれ、兄が眠るためにハルモニウムを演奏することを強要されることもある。ヴェルトハイマーは、袋小路に陥ってしまった自分の人生の憂さを、妹を束縛し、虐げることによって晴らしているのである。

しかし、妹は、四十六歳にして兄、ヴェルトハイマーの下から逃げ出すことに成功する。偶然知り合ったスイスの富豪の下へ着の身着のまま脱出し、結婚するのである。ヴェルトハイマーは、自分の下へ戻るように妹へ向け何度も手紙を出す、妹からの返事は一切ない。ヴェルトハイマーは、最終的に、この妹の住む町へ行き、婚家から百歩の距離で首を吊って自殺するのである。

このような事情を背景として、ヴェルトハイマーの自殺に関する「私」の思考は、ヴェルトハイマーと妹の関係を巡っても旋回することになる。「彼女(妹)は、私を見捨てたのだ、とヴェルトハイマーは常に嘆いた」(38)と「私」は想起する。妹が出奔した後のヴェルトハイマーは、「当初は、麻痺したように何日間も椅子に座ったまま」(38)であったが、その後「狂ったように部屋を歩き回り、結局父の遺したトライヒの狩猟小屋へ引きこもる」(38)。「ヴェルトハイマーは、(...)妹が自分のためにのみ存在するという確信の犠牲者」(43)であり、その確信に反して妹が彼の下を逃げ出したという事実、「それはヴェルトハイマーにとって恐ろしい程の恥辱となった」(66f.)のである。そして「私」の思考は、「妹が去った後、ヴェルトハイマーには自殺以外の選択肢は残されていなかった」(78)という地点にまで至るのである。

テキスト内の事実としてヴェルトハイマーは、妹の出奔によって明らかに大きな精神的ショックを受け、その後の精神状態は非常に悪化している。ネガティブな関係だったとはいえ、妹との生活がヴェルトハイマーの人生の支えであったことは間違いなく、婚家から至近距離の場所で自殺することによって、ヴェルトハイマーは妹への復讐を果たしていると見なすことが出来る。この自殺現場と妹の婚家の空間的な距離の近さがヴェルトハイマーの自殺と妹の出奔という二つの事実の因果関係の強さを証しているとも見なし得るだろう。

しかし、「私」はヴェルトハイマーの自殺に関して、彼の妹が彼の下を去ったという事実の果たした役割の大きさを認めながら、他方で次のように思考する。妹の出奔、「それはヴェルトハイマーにとって恐ろしい程の恥辱となった」、その後ヴェルトハイマーは、「ただ自殺することだけを考えた、がしかし実行はしなかった。グレンの死がヴェルトハイマーの自殺への考えを固定的なものにした、妹の出奔は彼のこの考えを強化した」(66f.)のだ、と。時系列的には、妹がヴェルトハイマーの下を去ったのが彼の自殺の二年数ヶ月前であることがテキストから読み取られる。グールドの死がいつに設定されているかはテキストには明示されていないが、グールドが実際に亡くなったのは、『没落者』が発表される前年の十月であり、テキスト内の現在の季節が春であることを考慮すれば、グールドの死はヴェルトハイマーの自殺の約半年前に生じたと推定することが出来るだろう。従って、妹の出奔がヴェルトハイマーの自殺の契機となり、グールドの死がそれを決定的なものにした、という「私」の思考は、出来事の時系列的な客観性に基づいたものであるかのように見える。

ところが、ヴェルトハイマーの自殺に対してグールドの存在が果たした役割について考察する際の「私」はこれ

と全く逆の立場を取っているのだ。「グレンの死は、彼にとって(...)自殺の決め手ではなかった、まず妹が彼の下の去らなければならなかった、しかしグレンの死はすでに彼の終わりの始まりであり、発端は妹とスイス人との結婚だったのだ」(77)。あるいは別の箇所においても同様に、「グレンは事実まだヴェルトハイマーの自殺にとっては決定的なものではなかった、まず妹の出奔、スイス人との結婚」(88)があったのだ、とされている。この部分では、「私」は、グールドの死ではなく、妹がヴェルトハイマーを捨て去ったことに彼の自殺の決定的な要因を見ているのである。

このような「私」の思考は、客観的には互いに矛盾し合うものだ。ここにベルンハルト作品における「矛盾の構造」⁽¹²⁾の萌芽を見ることも可能だろう。しかし、『没落者』のテキストでは、このような明らかな矛盾を形成している箇所は例外的なものだ。ヴェルトハイマーの自殺の原因に関する「私」の思考の流れは、矛盾点の形成を意図するものと解釈されるべきではなく、思考が何か一つの原因に決定的に行き着いてしまうことを自ら防いでいると見なされるべきだろう。すなわち、ヴェルトハイマーの自殺に対するグールドの存在を巡る「私」の思考の流れがあまりに強くなりすぎる時、「私」は、ヴェルトハイマーの妹の出奔を想起してその流れにブレーキをかける。また、妹の出奔について思考する際にも同様にグールドの死を想起し、自殺の原因として妹の存在が最終結論になることを避けているのである。「私」は、ヴェルトハイマーの自殺の原因に関する思考に際しては、最終的には常に未決定の状態を保持しておきたいのである。

ヴェルトハイマーの自殺に関する「私」の思考は、グールドの存在、並びに妹の出奔に限定されるわけではなく。以下にその他の原因に関する思考も指摘しておきたい。

「私」の思考は時に、ヴェルトハイマーがそもそも自殺への傾向をその性質として強く持つタイプの人間であり、彼の自殺は必然的な結果であるという方向を辿る。「子供の頃から彼は死にたい、自殺したいという願望を持っていた」(68f.)のであり、また「没落者は、すでに没落者として生まれたのだ、彼は常に没落者であったのだ」(209)と「私」は思考する。故に、ヴェルトハイマーはいつ自殺しても不思議ではなく、彼がそうしなかった理由は、「それに向けて極限の集中に至ることがなかった」(68f.)からなのである。従って、集中度さえ満たすなら、「私」の思考の中では、ヴェルトハイマーは「実際に自殺するより何年も前に自殺するべきだったのだ、グレンの死よりもずっと前に」とされるのである。

また、テキストの中では、ヴェルトハイマーの自殺の原因に関する「私」の思考の方向性として、グールドの存在性や妹の出奔ほど明瞭ではないが、「私」とヴェルトハイマーの関係性へ向かうものも見られる。当然のことながらこれは自己批判となって「私」を傷つけ、破壊する可能性を持ち、それ故「私」の拒否反応を伴うものともなっている。

「私」とヴェルトハイマーは、資質的には極めて似通ったタイプの人間である。共に「精神的」な人間として、当初はピアノのヴィルトウオーゼとなることを目指す。また家庭環境面においても、実業家一族の子弟として物質的には何不自由することのない環境に育ちながら、芸術には無理解な両親に逆らってピアニストへの道を選択するという点まで共通している。これらの点に関しては、グールドもこの二人とは共通した背景を持っている。ピアニストとしての才能を持ち、芸術に対する理念を共有し、同様な家庭背景、経済的状况にある三人が、ホロヴィッツのコースで出会い、共同生活を送りながらピアノの修練に明け暮れ、生涯の友情を結ぶのだ。しかし、グールドは他の二人とは決定的に異なる点を有する。彼のピアノの才能は、ホロヴィッツのコースの他の参加者と比してより良いというような一般的なレベルのものではなく、世紀に一人の存在として、他から隔絶したレベルにあるのである。

「私」とヴェルトハイマーは、共にこのグールドの才能に敗れ、ピアニストとしてのキャリアを諦め、「精神的人間」として他の道に転向する。生活の拠点も共にウィーンと上部オーストリアの二カ所に持ち、それらの間を行き来しながら頻繁に顔を合わせる関係を継続している。このように、特に対グールドという視点から捉えるとほぼ同質とも言える「私」とヴェルトハイマーであるが、グールドを抜きにして、「私」とヴェルトハイマーのみの対称性という見

方の下では、二人の存在性にも差異が見られる。テキスト内において「私」は、自分とヴェルトハイマーのこの差異に拘る。そうしなければ、「私」もヴェルトハイマーと同じ運命を辿ることが避けられないからである。

「私」とヴェルトハイマーの差異をまとめるならば以下のようになるだろう。「私」はヴェルトハイマーよりも強く、より大胆であり、より決断力に富んでいる。二人は共にピアニストとしてのキャリアを諦め、最終的には自らの所有する高価なグランドピアノを処分することでキャリアの終わりを決定づけている。その際もまず「私」がその所有するピアノを処分し、それに習ってヴェルトハイマーも自らの所有するピアノを処分している。このように、人生の重大な岐路において常にヴェルトハイマーが自分を参考としていることについて、「私」は以下のように述べる。「私にある意味で責任があるのだ、私は、重要な事柄において常に彼(ヴェルトハイマー)の手本であった」(23)。「私」は、才能や本質的な資質という点においてはヴェルトハイマーと同種の人間であるが、決断力や思考における自由度という点においてヴェルトハイマーにはない強度を有している。『没落者』のテキストで「私」は、自らがピアニストとしてのキャリアを諦めた理由についても、ゲルドの才能を目の当たりにしたことが直接の原因ではなく、その以前から考えていたことであると強調している。芸術家を目指すのであれば完全性、至高性を志さなければならず、自分の才能がそのためには足りないことが、ゲルドと会う前から自分には分かっていた、と「私」は主張するのである。このことがたとえ「私」の強がりであったとしても、ゲルドと出会いさえしなければ、自分はピアノのヴィルトウオーゼになれていたであろうと常に嘆くヴェルトハイマーと、そのような言葉は発していない「私」との差異は明らかだ。

ホロヴィッツのコースの終了後も「私」とヴェルトハイマーは直接顔を合わせる交友関係を長期間継続している。しかし、テキスト内ではその具体的内容は明らかにされていないが、極めて深刻な精神的危機に陥った「私」は、ある時単独でオーストリアを離れ、ポルトガルの親戚の下に身を寄せ、その後はスペインのマドリードを拠点とする生活を送っている。この件に関して、テキストでは、ヴェルトハイマーの反応が次のように語られる。「私がいきなりマドリードに行ってしまったこと、誰にも一言も言わず、全てをオーストリアに残したまま、そのことを彼(ヴェルトハイマー)は許さなかった」(61)。また、「私」がオーストリアを離れた時期については、「私は、三年間(オーストリアを)離れていた、(...)、この三年間、ウィーンへ戻ることは最早想像できなかった」(89)とされている。すなわち、「私」がヴェルトハイマーを捨て、オーストリアから脱出した時期はヴェルトハイマーの妹の結婚よりも前だったことになる。時系列的に見れば、長年の親友であった「私」がまずヴェルトハイマーの下を去り、次に妹が出奔し、そしてゲルドの死が続く、ヴェルトハイマーの自殺が生じたことになる。マドリードに去ってしまった「私」に向け、ヴェルトハイマーは五通の手紙を書く。そのうちの四通までを「私」は無視し、最後の五通目に対し、自分はマドリードを離れられないと返答する。その間、ヴェルトハイマーは妹にも逃げられ、妹に宛てた手紙の返信もなく、「私」宛ての手紙もほとんど無視されていたことになる。ヴェルトハイマーの自殺に与えた「私」の行為の影響は明白なものであると言えるだろう。

上述したような、ヴェルトハイマーの自殺の原因として「私」が思考するヴェルトハイマーの元来の性質は、彼の自殺に対する「私」の責任を認めまいとする「私」の反応の現れでもあることが示されている箇所もある。ヴェルトハイマーはもっと早く自殺するべきだったのだ、「と私は自分の良心の呵責に逆らって考え」(81)るのであり、彼からの手紙にほとんど返事を出さなかったことと自殺の因果関係を意識するが故に、「私は、彼の自殺に対する自分の罪という考えを猛烈に排除」(81)するのである。この時の「私」の思考は、自分やヴェルトハイマーの妹が彼を捨て去らなくても、「彼はすでに自殺しごろ(selbstmordreif)だったのである」(82)という言葉に行き着いている。

「私」は、ヴェルトハイマーの自殺に関して自らの責任を感じていないわけではない。彼らは、ある時点まではまさに運命共同体だったのであり、ヴェルトハイマーの気持ちとしては、互いに反発しつつも共に人生を下降していく同志的な存在として「私」を捉えていたのだろう。彼にとって妹がそのような存在であったのと同様に、言わば道連れとして。しかし、「私」はヴェルトハイマーにはない資質を備えている。ピアノのヴィルトウオーゼを目指す

十数年間の真剣な修練の後、「私」はある日突然知り合いのピアノ教師の家を訪れ、凡庸な才能しか持たない彼の娘に自分の所有する高価なグランドピアノを譲渡してしまう。ピアノの価値も分からない娘によって、当然の結果としてそのピアノは短期間のうちに壊されてしまう。また、マドリッドでグールドについての著作を試みていた「私」は、原稿が完成する度にそれを破棄してしまう。ピアノ教師の娘によって壊されていくピアノを見ながら、また、ホテルの部屋のゴミ箱に投棄された原稿をゴミ箱ごと持っていくメイドの姿を見ながら、「私」は開放感の愉悅に浸るのである。この、ある種自虐的な「私」の行為はしかし、マゾヒスティックな自己破壊にアクセントがあるわけではない。そうではなく、長期間の努力の末に、その結果を無に帰することによって、新たに道を進み始める地点に立つことに意味があるのである。「私」の努力の結果は無である。しかし努力の成果として「私」の潜在力は上がっているはずである。そのような潜在力を持ちながらゼロ地点に立つという、未来への可能性が「私」の原動力となっているのだ。「私」はヴェルトハイマーには欠けているこの資質によって、全てを置き去りにしてオーストリアを去ることが出来る。おそらく、ヴェルトハイマーの妹もまたそのような資質を有しているのかもしれない。しかし、ヴェルトハイマー自身は、それを持たなかった。長年の努力の結果を一瞬で無に帰することは容易なことではない。「私」は、ヴェルトハイマーの自殺に対する自らの責任を否定しつつも、彼にはない資質を持つ自分が「ヴェルトハイマーにとって常に害となる存在だった」(148)と認めるのである。

以上見てきたように、ヴェルトハイマーの自殺の原因を巡る「私」の思考は、グールドの存在のみならず、ヴェルトハイマーの妹と彼の関係性、そして「私」とヴェルトハイマーの関係性へ向けられていることが確認されたであろう。これらの方向性は、ある時は互いに矛盾し合い、またある時は互いに補完し合うものでもある。重要な点は、これらの方向性が決して一本化されていないということだ。ヴェルトハイマーの自殺の原因は、グールドの芸術、死、言葉に、また妹の出奔、「私」との関係のいずれか一つに最終的に結論づけられてはいない。ヴェルトハイマーの自殺を巡る「私」の思考の試みは真摯なものだ。最初から結論に至ることを放棄するようないい加減なものではない。自殺の原因と自らの関係性についての思考は、自己破壊の可能性も秘める危険なものである。しかし、拒否反応を示しつつ「私」はそこに踏み込んで行くことにも、「私」の姿勢の真摯さが証明されている。しかしながら「私」は同時に、自らの真摯な思考の流れが一つの結論に行き着くことを、明らかに意図的に回避しているのである。このように、ヴェルトハイマーの自殺の原因に関しては、最終的には未決定な状態が堅持されるのである。

「私」の思考の流れが、未決定な状態に止め置かれることの意味は、上述したように、ヴェルトハイマーにはない「私」の資質と関係する。すなわち、長期間のピアノの修練、原稿作成といった真摯な努力の果てにそれらを放棄してしまうこと。そしてそれらの努力の期間に蓄えられた新たな力を持ってゼロ地点に立ち、新たな試みに着手すること。このことが「私」にとって何より重要な意味を持つのだ。「私」の思考の流れの未決定性は、「私」の人生において「私」が繰り返してきたゼロ地点への回帰をテキスト上で再現したものと見なすことが出来るのである。

3. 『没落者』のテキストにおけるその他の未決定性と「世界観の芸術」

『没落者』のテキストの「私」は、グールドの死とヴェルトハイマーの自殺に大きな衝撃を受けている。特にテキスト内の現在、「私」はヴェルトハイマーの埋葬に参列したばかりであり、彼の死因についても埋葬の場でヴェルトハイマーの妹から自殺であることが知られるのである。このような状況にある「私」は、二人の親友の死について、後に残されてしまった自分の存在性について、思考を巡らせなければならない。そうしなければグールドとヴェルトハイマーの死から「私」は距離を取ることが出来ず、彼らの死に巻き込まれてしまう危険から逃れることが出来ないのである。

このような「私」が、特にヴェルトハイマーの自殺に関して、その原因を巡って思考することはある意味で当然

の成り行きである。「私」とヴェルトハイマーはある時点に至るまでは運命共同体を形成していたのであり、そのような関係性において片方の人間が自殺することは、もう片方の人間の自殺の可能性をも意味するからである。また、「私」は親友の死に関して自らの責任を意識している。ヴェルトハイマーの自殺という事実を処理することなくして「私」の今後の生存はあり得ないのだ。

このような視点に基づけば、ヴェルトハイマーの自殺の原因に関する「私」の思考は一つの結論を目指してなされるべきものとなる。そうでなければ、彼の自殺という事実には片をつけることはならないからだ。幾つかの可能性が併存したままでは、「私」は親友の自殺に関して心理的決着をつけることは出来ず、それから解放されることは不可能である。しかし、「私」の思考は決して最終的な結論へは至らない。それ故、『没落者』のテキストにおける「私」の思考の流れは、一般的な解釈者、受容者の目にはネガティブな結果を伴うものとして映るのである。簡潔に言うならば、試みに失敗しているものとして。

しかし、本稿で論じてきたように、「私」の思考的戦略はそのようなものではない。「私」の試みる個々の思考の流れはそれぞれ真摯な追求となっているが、「私」は意図的にそれらを客観的な最終結論にまで持っていかない。「私」の思考の複数の流れは時に重なり合い、時に矛盾する。「私」はそれらを纏めようとする位置に立つことはない。そうではなく、常に未決定な状態を維持しようとするのである。そしてその状態から、新たな力を持って、新しい思考の流れを作り出していくのだ。

『没落者』のテキストにおける未決定性をこのように捉え直す時、「私」の思考の流れの行き着く先が未決定なままであることは、ヴェルトハイマーの自殺に関するものだけに認められるものではないことが明らかになる。

例えば「私」は、テキストの冒頭部において、トライヒにあるヴェルトハイマーの狩猟小屋を訪れるために宿泊するつもりで宿屋へ足を踏み入れる。宿屋は女主人が一人で切り盛りしており、「私」が入った時、宿の食堂には他に客はいない。女主人は姿を見せず、「私」は立ったままの状態であれこれと思考を巡らせる、「人を呼ぼうか、呼ぶまいか、決められないままに」(46)。「私」は、結局のところ、自ら声を出して女主人を呼ぶことはない。そしてそのままの状態で立ち尽くし、テキストが約三分の二を経過した時点でようやく女主人が姿を現すのである。この「私」の、女主人を呼ぶか呼ぶまいかという逡巡の態度も、未決定性の要素の一つとして捉えることが可能なのである。そして、「私」の以下のような言葉に、この未決定性が「私」の思考と深く関連するものであることが示されるのだ。「私は、女主人を呼ぼうとしたが、最後の瞬間に思いとどまった、突然私は不安になったのだ、彼女が早く来すぎてしまうことに、すなわち、私の目的にとって早すぎることに、私の思考の流れを遮断してしまうことに、ここで考えたこと、グレンとヴェルトハイマーについての思考のあれこれを壊してしまうことに」(53)。

また「私」は、スイスのクールで行われたヴェルトハイマーの埋葬からウィーンに戻る途中で、ヴェルトハイマーの狩猟小屋に寄るのであるが、最寄り駅で下車し、宿へ入った後も狩猟小屋へ向かうという行為に対する逡巡を示している。「私」は、ヴェルトハイマーの狩猟小屋へ行くという自身の考えを「恥知らず」(63)だと見なすと同時に「それをヴェルトハイマーに対する責任」(63)であるとも考えている。さらに暫くしてから「私は、今非常に疑い始めていた、(自分が)クールから直接ウィーンへ戻り、トライヒに寄らなければ良かったのではないかと」(76)考える。また、自分が狩猟小屋へ行く理由についても、ヴェルトハイマーの遺稿の確保のためであると見なす場合もあれば、「あるいは単なる引き延ばしだったのかもしれない、(自分が)ウィーンを嫌悪するが故の」(79)とする箇所も見られる。このような細かな部分に見られる「私」の逡巡についてもやはり未決定性の現れの一つと見なすことが出来るだろう。そしてこれらの要素の一つ一つが、「私」の思考の可能性と自由度を確保することに寄与しているのである。

「私」は、オーストリアを離れ、スペインのマドリードに拠点を構えているという状況下で、オーストリアに所有する二カ所の住居の売却も視野に入れている。ここにも未決定性の要素が確認出来るのである。

ウィーンでヴェルトハイマーの死の知らせを受けた時、「私」は、「何人かの購入希望者にウィーンの住居を見

せていた、それを私は数年前から売ろうとしていたが、適した買い手を見つけられないでいた」(138)。ベルンハルト作品の大抵の主人公たちと同様に、「私」はザルツブルク、ウィーン、オーストリアに対して、愛憎入り交じる強い感情を有している。『消去』(1986)の主人公ムーラウが、先祖伝来の城を相続し、それを最後にイスラエルの財団に寄付してしまうと同様に、『没落者』の「私」もウィーンとデッセルブルンの二カ所にある持ち家を「消去」しようとしている。ベルンハルト作品の主人公の一人として「私」には、そうするための理由は充分過ぎるほど存在するのである。実際に「私」は購入希望者に物件を案内する段階まで話を進めている。しかし、「私」はその段階に至ってもなお、「このような難しい時代に、ウィーンの住居を手放すのはナンセンスなのではないか、とも思って」(139)いる。ヴァンクハムの宿の女主人との会話の中でも、「私」は彼女も知っているデッセルブルンの狩猟小屋の売却について、「現在のような経済危機の時代に、リアリティーを売却するのは愚かなことだ」(172)と述べる。そして、「私はウィーンの住居も、デッセルブルンも売らないつもりだ」(139)と考えるのである。

「私」のウィーンやデッセルブルンに対する反感並びに諦めの感情は根深いものだ。「私」がマドリードに去った時、十年間はウィーンにもデッセルブルンにも戻らない決意を固めており、それ故にヴェルトハイマーの窮状に際してもマドリードを離れることはない。このような方向性に添うならばオーストリア内に所有する不動産の売却は当然の結果となる。しかし「私」は、売却の最終段階で常にそれを撤回している様子が窺える。そしてまた、この「売却しない」という状況も「私」の最終結論ではない。売却するか、そうではないのか、という未決定な状態を維持することに「私」の本来の意図があり、その状態から、「私」の思考の自由度が生じるのである。

以上、『没落者』のテキストにおける未決定性の原理が、ヴェルトハイマーの自殺の原因に関する思考の他にも、テキスト内で現れる「私」の細かな選択、行動にも及んでいることが示されたであろう。

『没落者』のテキストには、「私」の思考と未決定性の原理の関係性を示すものとして解釈可能な言葉が登場する。それが「世界観の芸術」である。上述してきたように、「私」とヴェルトハイマーは本質的には極めて近い存在である。可能性としては、ヴェルトハイマーではなく、「私」が自殺してしまっていたかもしれないのだ。テキスト内で「私」は、そうした自分とヴェルトハイマーの差異を幾度となく強調する。その中に、自分がオーストリアを離れることが出来、ピアノのキャリアを捨て去ることが出来た理由として次のように述べる箇所がある。「一瞬で、いわゆる一夜にして、私は、世界観の芸術家になった」(74)と。その結果、「私」は解放され、オーストリアを離れて新しく著述の道に入ることが出来たのだ、と。この「世界観の芸術」の具体的な内容に関しては、しかし『没落者』のテキストで語られることはない。「私」はただ以下のように言うのみである。「ただ考え、考える以外に何もせず、思考を完全に自由にすること。世界観に身を任せ、従ってしまうこと」(73)で充分なのだ、と。その結果自分は、ヴェルトハイマーとは異なってオーストリアを一夜にして捨て去ることが出来たのだ、と。

「私」の言うこの「世界観の芸術」を、本稿で論じてきた未決定性の原理と関係づけて解釈するなら、次のようになるだろう。「世界観」とは世界に対する物の見方、世界を解釈する方法とその結果を意味するものだ。通常、ある個人は、自らの経験や客観的なデータを基に自分の世界観を形成している。それは個人の長年の経験に基づいて得られるものであり、また各個人が所属する文化的コードによっても規定されるものだろう。それ故、ある個人が持つ世界観は千変万化なものではない。それは、各個人のアイデンティティーにも結びついており、ある程度固定化されたものだ。そうでなければ各個人は、自らの立ち位置、並びに人生の方向性を決定することが出来ないからである。しかし、『没落者』の「私」は、自らの世界観をあえて客観性や文化的コードから切り離そうとする。その時々自分の主観のままに自らの思考を創造的に展開しようとするのである。その思考の流れは中途半端なものではなく、ある種の世界観と呼べるものにまで展開される。そして、一つの思考が充分に展開し尽くされた後に、また次の主観的思考が展開される。その際、過去の思考は次の思考を妨げてはならないのである。すなわち、思考する者は、各思考間の関連性や因果関係を意識する必要はなく、それらの間に矛盾や逆説が生じることも躊躇されないのだ。これが、「私」の言う「世界観に身を任せる」方法なのである。「私」はこの方法

を確立し、それに従って危機を乗り越えてきたのであり、今また親友二人の死を乗り越えようとしているのである。このような「私」の方法は、「私」の思考の自由度に左右される。そして、この自由度を保証する最大の要素が、未決定性の原理なのである。

註

(1) 原題は、"Der Untergeher"。本稿では以下の版を底本とする。

BERNHARD, Thomas: "Der Untergeher". suhrkamp taschen buch 1497. Frankfurt am Main 1989.

以下、テキストからの引用部には末尾に頁数のみを記す。なお、本稿における一次文献、二次文献共に引用部は全て拙訳による。

(2) HENS, Gregor: "Thomas Bernhards Trilogie der Künste. Der Untergeher, Holzfällen, Alte Meister". Rochester: Camden House 1999.

(3) 実際のグレン・グールドも『没落者』発表の前年の1982年10月に脳内出血のためトロントで亡くなっている。ベルンハルトは、明らかにこの事件に触発されて『没落者』のテキストにグールドを登場させている。

(4) ヴェルトハイマーの狩猟小屋のあるトライヒ (Traich)、「私」の宿泊する宿のあるヴァンクハム (Wankham)、「私」の持ち家のあるデッセルブルン (Desselburn)、これら三カ所からの最寄り駅とされるアットナング・プフハイム (Attnang-Puchheim)もベルンハルトの持ち家があった上部オーストリアの実際の地名。ヴェルトハイマーの狩猟小屋のあるトライヒは、ベルンハルトの持ち家があったオーバーナタール (Obernathal)とは至近であり、彼の狩猟小屋の内部構造もベルンハルトの持ち家をモデルとしている。

(5) MITTERMAYER, Manfred: "Von der wirklichen in die künstliche Welt. Zum Verhältnis von Literatur und Realität bei Thomas Bernhard". In : Bernhard-Tage Ohlsdorf 1996. Materialien. Hg. von Franz Gebesmair u. Alfred Pittertchatcher. Weitra, S.127-173, hier S.153.

(6) HUBER, Martin / MITTERMAYER, Manfred (Hg): "Bernhard Handbuch. Leben- Werk- Wirkung". 2018 Stuttgart, S.69.

(7) MITTERMAYER, Manfred: "Thomas Bernhard. Suhrkamp Basis Biographie". Frankfurt am Main 2006, S.103.

(8) PFABIGAN, Alfred: "Thomas Bernhard. Ein österreichisches Weltexperiment". Wien 2009, S.304.

(9) MITTERMAYER, Manfred: "Thomas Bernhard. Eine Biografie". Wien- Salzburg 2015, S.362.

(10) HUNTEMANN, Willi: "Artistik und Rollenspiel. Das System Thomas Bernhard". Würzburg 1990, S.47.

(11) "Virtuoso"はドイツ語では"Virtuose"と表記される。本稿におけるカタカナ表記は、ドイツ語の音に近い「ヴィルトウオーゼ」とする。

(12) 拙論「トーマス・ベルンハルトの『古典絵画の巨匠たち』について－矛盾の構造－(岐阜聖徳学園大学外国語学部紀要第59集31頁～46頁)を参照。